

令和4年3月より、ふくしま学力調査等の結果分析を活用したエビデンスに基づく支援を行うため、宮城教育大学教職大学院の田端健人教授を分析協力者に招き、研究を進めている。前項で紹介した「グラフ化ツール」についても、田端教授の協力を得て作成したものである。今後も、田端教授と連携しながら、データ分析を活用したエビデンスに基づく支援を行っていく。

【分析協力者プロフィール】

宮城教育大学 教職大学院 教授 田端 健人 氏

<研究>※科学研究助成事業（科研費）・基盤研究B

○研究題目「グローバル世界を視野とする学力・非認知能力の効果的学校モデル」

(2020-22年)

「学力/非認知能力を効果的に育成するスクールリーダーのデータサイエンス」

(2023-25年)

※ 本研究を進めるチームは、田端教授他7名

○研究の概要

- ・ 児童生徒の学力と非認知能力を向上させる「効果的学校」の姿を明らかにすること。
- ・ 校長のどのようなリーダーシップが、教職員のどのようなコラボレーションが、教師のどのような学級づくりや授業や支援が、児童生徒の学力と非認知能力を効果的に向上させるかを明らかにすること。

※ 全国学力・学習状況調査等を用いて、上記の研究を行っている。

<経歴等>

2019年4月～ 宮城教育大学 大学院教育学研究科 専門職学位課程 高度教職実践専攻
(教職大学院) 教授(現職)

2021年4月～ 文部科学省 学力調査アドバイザー(現職)

<主な著書>

○『IRT分析ソフトEasyEstimationによる全国学力・学習状況調査の検証と経年比較』
(パイディア出版 2022年6月13日発行)

○『子どもの言葉データサイエンス入門－jReadabilityの活用と検証－』
(パイディア出版 2021年)

学力向上取組の成果

宮城教育大学教職大学院 教授 田端健人

令和7年度全国学力・学習状況調査、中3数学で、福島県の平均が全国差を0.095まで縮めました。過去6年間のデータで、全国平均差を0.100未満に縮小したのは、今年度が初めてです。一覧にすると、以下の表になります。

年度	H31	R3	R4	R5	R6	R7
中3数学 全国との平均差(d)	-0.121	-0.108	-0.169	-0.182	-0.173	-0.095

この表では平均差を、正答率のポイント差ではなく、効果量(d)で計算しているので、より精度の高い経年比較になっています。令和7年度小6算数も、全国差はd = -0.125で

したが、前年度の差 $d = -0.152$ より縮小しています。平均点は、集団規模が小さいほど変動しやすいですが、中3数学の平均点を上げるのは、市町村単位はもちろん、学校・学級単位でさえ決して容易ではありません。それが県単位で実現できたのは画期的です。まぐれでできたとは思えません。

でも、ひょっとすると福島県の現中3が他学年より、たまたま学力が高い集団だったとしたらどうでしょう。そんな不安もよぎります。そこでふくしま学力調査で、R7中3とR6中3の「年度の異なる同じ学年の比較（算数・数学）」を経年で追ってみました。すると確かにR7中3はR6中2時点では1年上の先輩たち（R5中2）より高レベル9～11の割合が多く、学力が高い集団になっていました。ところが、R5中1入学時点では、R4中1の方が明らかに高レベルなのです（R4中1がR5中1より低レベル4～6の割合が少なく、高レベル8～10の割合が多い）。さらにさかのぼって小6・小5時点を見ると、グラフや数値で両集団には甲乙つけがたい結果でした。それゆえ、R7中3は、R6中3と比べ、特に学力が高い集団だったわけではなく、中学校進学後に着実に学力を上げていったと推測できます。逆に言えば、R6中3集団も、全国平均差を0.100未満にする潜在的学力は十分にあったと考えられます。

上記表の各年度は、ふくしま学力調査を実施してきた年度に当たります。平成31年度の独自学力調査全県導入は、挑戦的な試みによる学力向上をめざした福島県の偉大な一歩でした。「学力の伸びを引き出した学校の取組事例集」は今年度第5号を迎えます。この取組事例集にも、ふくしま学力調査導入後の福島県の学力向上方針の進展が現れています。特に令和6年度は、様変わりしました。「自己効力感」「学級風土」「規範意識」「主体的・対話的で深い学び」の4カテゴリーに焦点を絞り、授業風景等の写真も掲載されるようになりました。「安心」や「認め合い」や「対話」といったキーワードが躍動しています。写真でも児童生徒が机を寄せ合い、考えを伝え合う様子が多く見られます。全県あげてのこうした取組が実を結び始めたのではないのでしょうか。

学力向上、それと両輪をなす非認知能力向上の一丁目一番地は、学校や学級や家庭の「安心安全」にあります。人間関係トラブルやいじめや虐待のある環境では子どもは委縮し、すくすく伸びることなどできません。安心安全が損なわれ、生徒指導案件に追われるなら、学力向上どころではありません。家族や教師や仲間たちから大切にされ、認め合う環境で初めて、子どもは自分の底力を開放・発揮できます。家庭を変えることはできませんが、学校・学級環境なら教師たちの努力で変えることができます。間違っても失敗しても大丈夫という信頼感があってこそ、挑戦や冒険もできます。教師が一方的に教え込む授業（トーク&チョークの授業）から、子どもたち主体の授業への変革。子どもたちが間違えることを恥ずかしいと思わず、安心してたくさん間違い、それを共有し、どうして間違ったかを対話・探究できる学習環境。教師があえて間違えて、子どもたちに正してもらいたいのも良いでしょう。このようなアプローチが学力向上には近道であることを、福島県が証明しようとしているように私には見えます。